

## 2021 年度実施概要

学校名

岡山県浅口市立寄島小学校
--------------

採択活動名

地域に開かれた教育課程「よりしま学」の海洋教育プロジェクト
-------------------------------

実施単元 ※実施した単元の数に応じて記載してください

単元名	学年	教科
1. 「見つけよう！ よりしまの たのしいが いっぱい」	1	生活科
2. 「とび出せ！大すきなよりしまの町へ」	2	〃
3. 「とび出せ！より島の海へ」	3	総合的な学習
4. 「キラリいっぱい！守れ 寄島の海と人」	4	〃
5. 「寄島の魅力を見て、触れて、発信しよう」	5	〃
6. 「寄島歴史探検隊 ～海とともに未来へ～」	6	〃

取り組みの概要

別紙
----

## &lt; 1 年生 成果と課題 &gt;

## よりしま学の充実

## 成果

- ・各教科との学習を進めるにあたって、教材として寄島の青佐鼻海岸を何度も利用し、海の匂いや生き物の様子を五感で感じながら学習を進められたことは寄島の強みだと感じた。
- ・自然物を使って遊ぶ活動を通して、自然の様子や自然遊びのおもしろさに気付き、友達と関わり合いながらダイナミックに遊びを広げられた。
- ・ボランティアや保護者等の助けを借りて活動できたので、地域の方の温かさを感じながら学習することができた。
- ・自然の中で見つけた自然物の特徴やおもしろさに気付きながら、その特徴を生かして遊びに使うものを工夫して作り出すことができた。
- ・グループで、みんなが楽しんでもらうために工夫して作ったり、遊びを分かりやすく紹介するための工夫を話し合ったりする中で、自分のよいところと同時に、友達のよいところを見付けることができた。
- ・2年生との交流では、遊びながら助言してもらって進めることができたため、児童にとっては自然な流れで学び合いができていたと感じた。



図画工作科  
フォトフレーム作り



体育科  
1・2年生で海遊び



図画工作科  
土を使った造形遊び

## 課題

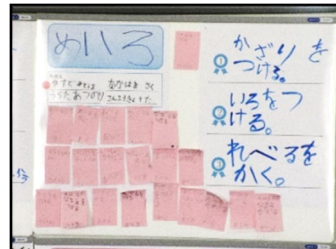
- ・経験したことが断片的に楽しい思い出とはなっているが、それらが寄島のよさや自慢できることという思いにつながるのには時間がかかるのだと感じた。12月に行った「教育相談アンケート」の「寄島のことが自慢できるか」という項目において、54%の児童が自慢できると答えたが、2年生以上は平均85%であった。単元目標にはなっていないが、指導者がふるさとの魅力についてなど、もう少し意識した言葉がけをすると、児童の意識が変わってくるのではないかと感じた。
- ・本時では、めあてを設定する時に、作る工夫と紹介する工夫を分けて考えた方が、児童の思考に沿ったものになったのではないかと感じた。また、まなボードを使い意見を出し合う際に、自分たちの班の意見と他の班の意見を書く付箋の色を変えておくと、視覚的に分かりやすかった。
- ・本時では、工夫を見付ける活動で、クラス全体での交流の場面を発表形式にしたが、「すなあそびコーナー」等の1つのコーナーを焦点化して取り上げ、みんなで考えながら話し合いができる環境作りが必要であった。
- ・クラス全体の紹介するための工夫を先に考えてしまったため、班での工夫を考える時間が同じような内容

の活動となってしまった。順番が逆であった方が思考の流れが自然であった。

- ・3学期に行う予定であった保護者への紹介と新1年生への紹介が、新型コロナウイルス感染症対策のため実施できなかった。紹介するために準備してきたことや練習してきたことを生かすことが出来ず、ビデオ紹介や展示という形になり残念であった。



本時の導入時の板書



本時のグループで話し合ったまなボード



本時のまなボードを使ったグループ発表の様子

### 自己肯定感の向上について

#### 成果

- ・「学びの姿」のカードを常時掲示しているため、様々な活動に利用しやすかった。児童らの意識の中に「学びの姿」像が浸透し、各教科のめあての設定や振り返りでも自らその言葉を取り上げて自分を見つめることができた。
- ・発達段階として、入学当初は「前向きさ」を取り入れることが難しい場面があった。児童によっては自分と他人を比べて落ち込んだり、かんしゃくを起こしたりしてしまうようなことがあった。しかし、レジリエンスの取組と「学びの姿」の取組の相乗効果で、あきらめずに課題に取り組もうとする姿が見られるようになった。

#### 課題

- ・1年生にとって、「学びの姿」の言葉の意味と行動が理解しづらいことがある。そのため、指導者は

普段からどのような行動がその意味を示しているのかをモデリングする必要があると感じた。



「なかよし あきのもり」を作ったり・遊んだり・紹介したりする活動

## &lt; 2年生 成果と課題 &gt;

## よりしま学の充実

## 成果

・第一次の町探検では、海遊びの楽しさを体感し、児童  
めて寄島の海に親しみをもつことができたと考える。  
た、寄島図書館や寄島漁協組合に行く際には、どんな  
か予想したり質問を考えたりすることで興味をもって  
ることができたと共に、この体験を通して、さらにい  
ろんな場所を探検したいという思いを膨らませることが  
した。第二次では、「人」に焦点を当て「えがおのひみ  
を調べに町探検に行ったことで、今まで知らなかった  
人の思いに触れることができた。また、仕事の手伝いをさせてもらえるということで、大変意欲的に活動  
に取り組むことができた。2回の町探検を通して、町にあるものや場所のよさやそこで働く人の優しさに  
気付き、「寄島っていいな。」「いい人がたくさんいるな。」という思いをもって発表会をすることがで  
きた。



は改  
ま  
場所  
調べ  
ろい  
でき  
つ」  
働く

・町探検で行く場所と他教科との関連を意識して学習を  
進めることが大切であると感じた。国語科では、4月に  
学校図書館の利用の仕方やマナーについて学習するこ  
とを生かして、図書館へ行くことができた。また、海に  
関わることとして、体育科では、海の生き物をテーマに  
した表現運動を行ったり、図画工作科の「えのぐじま」  
では、海に行ったことを想起させ創作したりするなど、  
相互に関連付けながら学習することで、児童の思考を  
つなぐことができたと考える。



・特に本時では、町探検でお世話になった方について紹介するために、グループごとにワークシートを  
用いて伝えたい内容について付箋に書いて貼った。その話し合いをすることで、一人一人の思いや考え  
を表現することができた。

## 課題

・本年度は、諸事情により2回目の探検先が4か所と少なく、1グループの人数が多くなってしまった。行  
き先を増やして、4人ほどの小グループで一人一人が自分事して取り組み、活躍の場を広げられるように  
したい。また、1回目の探検先に、再び行くことができなかつたため、発表グループを再編成する必要が  
あった。発表の工夫改善へのつながりが途切れる児童もいたため、1学期に2学期以降の依頼を早めにし  
ておく必要がある。



- ・本時は、①紹介したい人を決める。②伝えたい内容を考える。③工夫できることを考える。と内容が盛りだくさんだったため、全体で共有する時間がなかった。今回は②までにとどめ、グループの話合いで一番伝えたいこと考えさせ、それを全体で共有する時間を取った方が学習が深まったのではないかと考える。

### 自己肯定感の向上について

#### 成果

- ・「学びの姿」をカードで示すことにより、この時間で特に頑張ることが視覚的に分かり、児童は意欲的に学習に取り組んでいた。また、「今日は、他にもあるよ。」と自分でめあてを設定しようとする児童も見られるようになった。
- ・本時では、グループごとにワークシートと付箋を用いることで、一人一人が意見を出し合いながら話合いを進めていくことができた。「なるほど。」「同じ考えだね。」「これって、こういうこと？」など、言葉を交わしながら温かい雰囲気の中で活動に取り組んでいた。また、他グループの内容の意見を間違えて出した友達に対して、「向こうのグループに渡してこようか」と相手を否定するのではなく、受け入れて優しい行動を取る姿も見られた。友達との協働的な学びを意図的に仕組むことで、協力して活動する場を作ることができた。



#### 課題

- ・本時は、「学びの姿」の中から「表現する」「協力」の2つを提示して目標としたが、児童からも他の複数の意見が出たので、そのうちの一つの「工夫改善」を加えた。教師側から示すカードを毎時間熟慮して1つに絞り、振り返りをすると共に、児童の姿を見取ることができるようにしたい。



## &lt; 3年生 成果と課題 &gt;

## よりしま学の充実

## 成果

- ・実際にカキの養殖の様子を見学したり、地域の方の話を聞いたり、質問したりすることは、非常によい学習となった。寄島の海の魅力や、それを生かしている地域の方々の努力やすばらしさを実感することができた。中でも寄島の栄養豊富な海で育てたカキは、プロの料理人が絶賛するほど、濃厚でクリーミーな味になることを知った児童は大変驚き、寄島のカキを、さらには、ふるさと寄島そのものを自慢に思った。このようにして、寄島町は海に面していることが特徴であることを再認識し、海と食、海と仕事など、海と人々の生き方の深い関わりについて考えることができた。
- ・各教科でも、よりしま学と関連させて学習を進めてきた。特に、社会科の身近な地域の様子において、寄島の位置や地形を学び、実際に学校周辺にはどんなものがあるかを探索することで、身近に海があることを意識付けるきっかけとなった。また、寄島漁業協同組合や海の幸を扱う店が多くあることを知り、海と人々の生活に関係があることにも気付くことができた。
- ・本時では、まなボードを使い、前時の見学で気付いたことを仲間分けしていった。その共通点を考えることを通して、カキ筏の沖出しはたくさんの方々の努力や工夫によって行われていることについて考えを深めることができた。

## 課題

- ・カキの成長に合わせて、繰り返し見学を行ったことは有効であったが、事前学習で目的を一層明確にしておくことが必要だった。
- ・本時では、「まなボード」を使ってグループごとに気付いたことを書いて発表を行ったが、お互いの考えを共有するとき、やや分かりにくかった。実物投影機や ICT 機器を活用して、各班の意見を大きく、また比較しやすくすると、さらに考えが深まったと考える。



グループでの話し合い



発表の様子



## 自己肯定感の向上について

### 成果

- ・本やインターネットで調べたり、カキの養殖の様子を見学したりする中で、寄島のカキへの関心を高めていった。興味をもったことや疑問に思ったことなどの児童の意見を全体で紹介し称揚することで、意欲がさらに高まった。見学時には、どの児童も意欲的に地域の人に質問をして進んで交流しようとする姿が見られ、その思いに地域の人も答えて下さった。
- ・本時は特に「学びの姿」の中の「協力」を大切にして、学びを深めていった。「学びポート」を使ってグループでの話し合ったことで、友達の考えのよさを見つけ、その考えを自分のよさとして取り入れている児童も見られた。このようにして自他のよさを見つけながら、協力してグループ活動を進めることができた。そのためか、授業終末の振り返り時には、多くの児童が「学びの姿」：協力を達成することができたと考える。

### 課題

- ・よりしま学を中心に「学びの姿」活用してきたが、どの教科でも「学びの姿」を積極的に活用して、称揚する機会を増やすことで自己肯定感の向上へとつなげていく。



カキの沖出し



カキ打ち見学



カキ打ち見学



収穫したカキ

## &lt; 4年生 成果と課題 &gt;

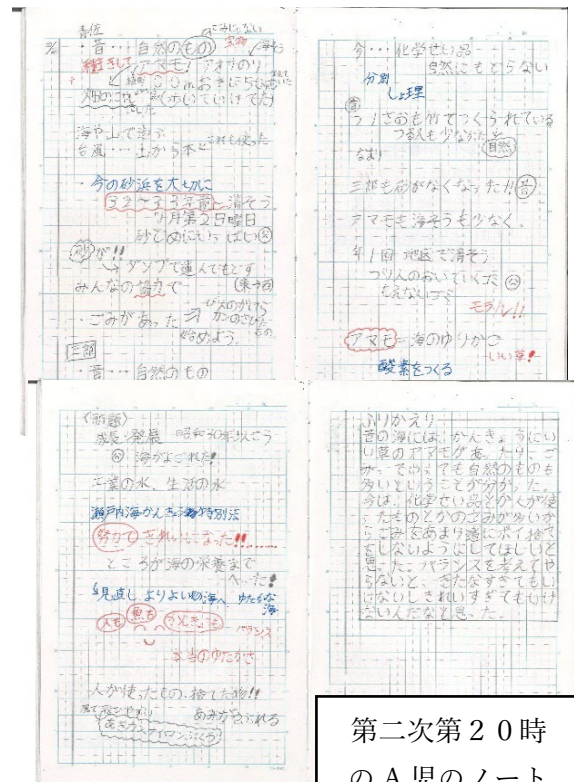
## よりしま学の充実

## 成果

・海的环境保全に関わる学習は、単なる危機喚起の学習となったり、断片的な知識のみが一人歩きしたり、自分事として捉えにくかったりすることがあるが、今回、児童はふるさと寄島の一員として、自分との関わりで追究していくことができた。その主な要因は、「両海岸に複数回行って体験したこと」「寄島の海の『キラリ』を十分に見つけたこと」「『人』と関わりながら学習したこと」と考える。実際に出向いて寄島の海の多様なよさ（キラリ）を十分に体感したことが、「自慢の海を守りたい」という追究の原動力となった。また、複数回、それぞれ目的を深化させながら体験したことで、書物等で得た情報を実感が伴った知識としたり、様々な情報を関連付けて生活とつないだりする姿が見られた。さらに、たくさんの地域や専門家の方と関わることで、教師の予想を超えて自分たちで学びを紡いでいくことが度々あった。その顕著な例がある。海岸を清掃する度に新たなゴミが見つかることに不安を感じる児童がいた中、家族にインタビューした児童の「昔の寄島の海はもっと汚かったらしい」という声から、地域や漁業協同組合の方に詳しく話を聞くことになったときのことである（第二次第20時）。寄島の海が地域の方の努力によって美しくなってきたことや海の本当の豊かさにはバランスが必要であること、山とのつながりの大切さ、海ゴミを生かすという見方、新たな取組の模索等、多くの気付きを得ることができた。その結果、「自分たちの努力でよりよく変えられる」という希望と、地域の方への誇りをもって、さらに追究していくこととなったのである。このように、「体験の充実」「キラリの実感」「人とのつながり」が、深い学びを生み出していったと言える。

・よりしま学は、横断的な学習であり、他教科とのつながりが深い。社会科の岡山県の様子やゴミ・水の学習のように他教科の学びをよりしま学で生かすことを意識して取り組んだことによって、児童の関心を高めたり思考の根拠をもちやすくしたりすることができた。さらに、他教科の学びそのものも充実した。例えば、国語科の新聞作りを生かして発信する内容を吟味したことにより、国語科の学びの定着を促すことができた。

・特に本時では、今話題のマイクロプラスチックの問題点を自分との関わりでよく考えていた。それは、実際に自分たちの手で見付け出したことによって、考えざるを得なくなったからである。見付けることを目的に実験をしているが、それは実は見付かってほしくないものであるという矛盾が児童の思考を揺さぶった。その布石となったのが、専門家のお話である。生活

第二次第20時  
のA児のノート



経験と伺った話をつないで考えて付箋に表現し、さらに友達と話し合いながら危険度のレベルを数値化することで、自分の言葉で考えを深めていくことができた。

## 課題

- ・本年度は、諸事情のため、継続的な取組を行っている高校生の話を聞く機会がなかった。大人だけでなく同じように学びの途上にある立場の人の話を聞くことができると、さらに、見方や考え方が広がった。
- ・本時は、45分授業で行ったが、弾力的な運用によって60分授業とすれば、学習活動3の全体での話合いの時間を十分にとってさらに考えを深めることができた。また、十分な時間を活用して、話合い後にマイクロプラスチックの問題を提起する映像資料を視聴することで、一層自分事として捉えることができたのではないかと考える。

### 自己肯定感の向上について

#### 成果

- ・「学びの姿」を「よりしま学」を中心にどの教科においても活用してきた。そのため、本時でも見られたように、自分たちで「今日は～を大切にしたらよいのではないか。」とめあてを創る姿が見られるようになった。また、クラス全体で取り上げた学びの姿に付け足して、自分が頑張りたいことをノートにメモする児童も見られ出した。児童自身が意識していることの現れである。このような姿が積み重なった結果、「よりしま学のふり返し」において肯定的な意見が多くなっている。
- ・友達との協働的な学びを意図的に仕組んだり、地域の人としっかりと触れ合ったりする機会を設けたことにより、他者の温かな言葉によって自分の学びを価値付けていくことができた。そのため、毎学期末に行っている自分の長所を記すアンケートに、短時間で答える姿が多く見られた。
- ・本時でも、分担して実験したり、学びボードを使って協力して考えたりする場を設けた。「あっ、そうか。」「ああ、分かる。」という友達の素直なつぶやきに自信を得ている姿や、友達の意見を基に考えを広げている姿が見られた。振り返りに友達や自分のよさへの気づきを書いている児童もいた。



## 課題

- ・それぞれの「学びの姿」には、段階がある。カードによって簡潔に提示しながらもレベルを意識できるようにも促していきたい。また、クラスの傾向が、選択する「学びの姿」に現れることを強く感じている。児童の見方の幅を広げるためにも、児童と共に創るときと教師が勧めるときとを意図的に使い分けていくことで、より望ましい姿を意識できるようになると考える。
- ・本時においても、どの姿を取り上げるか熟慮した。取り上げるカードを適切に選択できるかどうかは、教材研究の深さや児童の姿の見取りの確かさとつながっている。研鑽したい。

## &lt; 5 年生 成果と課題 &gt;

## よりしま学の充実

## 成果

・「魅力」というキーワードに絞って寄島について調べていくと、多くの魅力にあふれている地域であり、素晴らしいところに住んでいるという実感をもつことができた。それは郷土愛を育むことにつながるだろう。シーカヤック体験やアッケシソウ見学など、実際に見たり体験したりする活動が多いため、より実感しやすい環境が整っていると感じた。また、寄島の魅力をさらに感じたいと、地域に出向くフィールドワークを今年度から始めた。フィールドワークでは調べたい魅力ごとにグループをつくり、その魅力に関係のある地域の方々との交流の中で学びを深めることができた。この活動を通して、「寄島という場所は、様々な魅力があつてすごい。」という考えから、「寄島の魅力は、関係している方々の思いや努力によって輝いている」という考えへと移行していた。このことから、「自分たちにも何かできるのではないか。」と寄島により関わろうとする姿勢や意欲につながったと考えられる。

・よりしま学は、横断的な学習であり、他教科とのつながりが深い。特に、社会科の「水産業のさかんな地域」の学習では、水産業に関わりのある寄島町でとれる牡蠣やその他の海産物について探求する活動を取り入れることで、主体的に学びを深めることができた。また、理科の「花から実へ」の学習では、実際にアッケシソウの花粉や種を顕微鏡で観察することで、郷土の植物がどのように自生していくのかという視点で、よりしま学に結びつけて考えることができた。



シーカヤック体験の様子



アッケシソウ見学の様子

フィールドワークの様子  
(嘉美心酒造)

## 課題

- ・フィールドワークの活動後、1度行ってから分かることも多く、「もう1度行って〇〇のような活動がしたい。」などの意見が多く出た。今年度は時数や時期の関係で2度目のフィールドワークを行うことはできなかったが、理想は2度目のフィールドワークで「自分たちにできること」を各魅力につなげ、活動に取り組むことができれば、より活動に深みが出て児童の主体性も向上すると考えた。しかし、5つの活動場所に分かれるため、①各グループに大人がつく必要がある。②各魅力を見学する日時をそろえなければならないなどの難しい面がある。長期に渡る計画やボランティアの方々への声掛けなど、早め早めの準備が必要である。
- ・クロームブックを活用してよりしま学に取り組んできたが、誤操作によってデータが消えたり変わったりすることが多々生じた。一人一台端末の初年度ということもあり慣れていない点もあるが、まとめ方は今後も検討していく必要があると感じた。

## 自己肯定感の向上について

### 成果

- ・「学びの姿」を常に意識して学習に取り組むことができた。特に「せっきょくてき」を意識するなど、自ら課題に対して取り組み、自分事としてとらえて学習を深める児童の姿が見られた。また、体験活動が多く、クラスの友達や地域の方など、多くの人と触れ合うことで、横のつながりも広がったと考える。友達と協力して活動する中で、前向きな発言が多くあふれていたため、児童が自信をもって活動に取り組むことができたと考える。
- ・クローズドブックを使って活動することで、自分の考えや友達の考えを容易に交流することにつながった。友達の考えにコメントをすることで、自分以外の考え方に触れたり自分の考えに自信を持ったりと、相手や自分のよさに気づくことができた。またグッドボタン機能を使って、お互いに称揚することもできた。

### 課題

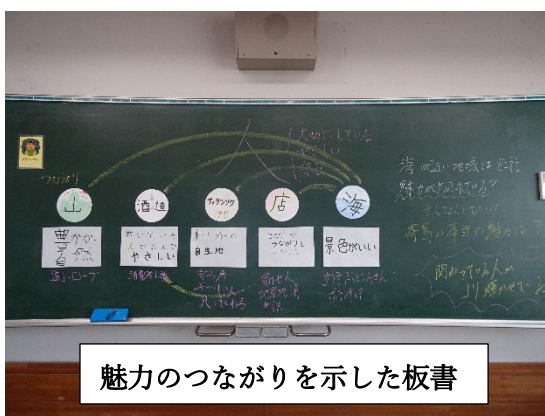
- ・「学びの姿」には様々な捉え方があり、児童全員の意識を統一することは難しかった。カードの中にも段階があり、児童のレベルや思考に合わせた提示の仕方を工夫する必要があると感じた。また教師が提示するだけでなく、児童から自分に必要な力を選択し意識することができるような取組もあるとよいと感じた。一例に過ぎないが、児童がより意識できるようにカードをミニシールにして、めあての下に貼るなどすると、さらに意識が強まるのではないかと感じた。



クローズドブック活用の様子



中学生との活動の様子



魅力のつながりを示した板書

グループごとの発表の様子



## &lt; 6 年生 成果と課題 &gt;

## よりしま学の充実

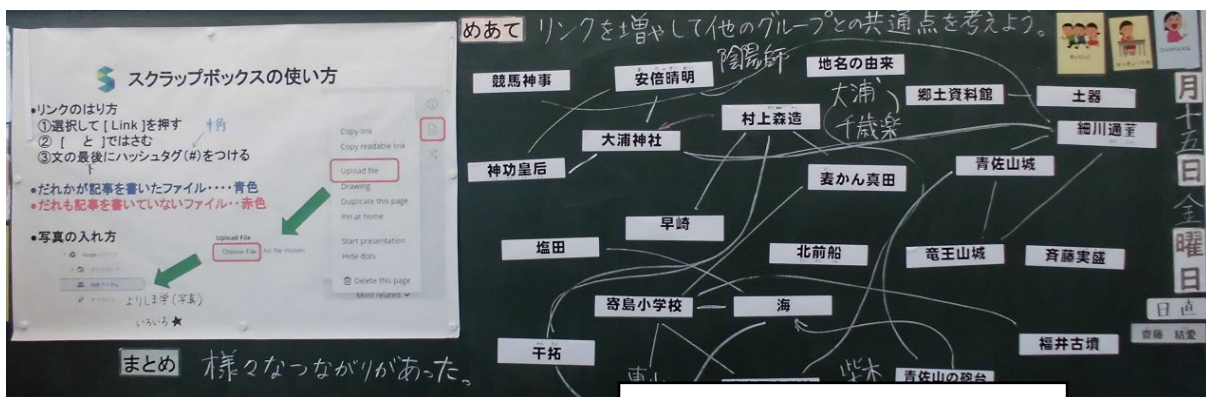
## 成果

- ・ 第一次の歴史探検や第二次の調べ学習を通して、寄島の歴史的な事象の多くは海とつながりがあるということを理解することができた。歴史探検で、実際に史跡を見学することは、非常によい学習になった。郷土の歴史の概要を捉えるとともに、かつて寄島に人が住み、海と共に暮らしてきたことを実感することができた。特に、三郎島の山の上からの眺めは、海側も陸側も故郷を感じさせてくれる穏やかな景色で、児童も感激していた。
- ・ ストーリーシートを作成するにあたって、他教科とのつながりの重要性を改めて感じた。昨年度までの経験や他教科の学習と関連付けて考えさせることで、寄島の海の豊かさについて考えを深めることができた児童が多かった。特に、国語科の意見文の単元である「私たちにできること」では、寄島の未来をテーマとすることで、よりよい寄島の未来について考えるよいきっかけとなった。
- ・ 特に本時では、スクラップボックスのリンクをはることで、故郷の史跡や歴史的な事象について、それらには共通点や関連があることを実感することができた。前時までは、グループごとに自分たちの調べたいことを中心に調べている児童が多かったが、本時を境に故郷の歴史を俯瞰してとらえることが少しずつできるようになった。



## 課題

- ・ 三郎島の歴史探検の際に三ツ山付近まで行くことを想定していたが、時間がなかったため、今年度は海に行く機会を作ることができなかった。時間的なゆとりがあれば、他教科や創意の時間を活用して、海で遊び海に親しむ活動を入れてもよい。
- ・ 本時では、歴史的な事象のつながりについて、ウェビングの図を板書することで、つながりや共通点に対する認識が深まった。ウェビングはつながりや共通点を視覚的にとらえることができる手法だ。この活動を第二次の前半で行っておくと、つながりや共通点をさらに意識しながら調べ学習を進めることができた。



自己  
肯定  
感の  
向上  
につ  
いて  
成果

本時の板書 ウェビングの活用

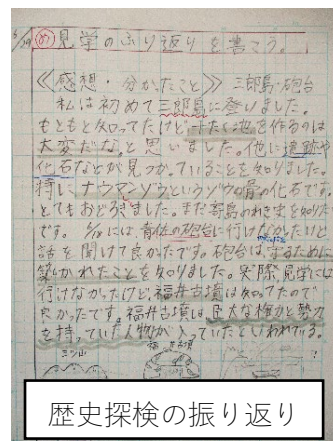
- ・「学びの姿」の中の「前向きさ」については、どの児童も意欲的によりしま学の学習に臨むことができた。昨年度までの実践を通して、郷土愛が少しずつ芽生えてきていて、歴史という難しいテーマであっても、親しみをもって学習できたのではないだろうか。「表現する」という内容については、苦手な児童が多いものの、本年度から本格的に活用している1人1台端末を利用することで、抵抗感なく取り組むことができた。
- ・本時では、クロームブックを利用することで、スクラップボックスを全員で共同編集をすることができた。スクラップボックスは、記事を書く活動自体は一人で行っていても、リンクができたり記事が増えたりすることをお互いに確認することができ、友達とのつながりを感じることができる。これは「学びの姿」の中では、「協力」にあたる。友達との相談が必要な時に、他のグループに尋ねに行く児童の姿も見られた。意図的に協働的な学習を仕組むことで、協力しながら活動する状況を作り出すことができた。また、「たくさん記事を書くことができてよかった。」「友達の記事が詳しく書けていたので、読むと自分たちの記事とのつながりが分かった。」等、自分や相手のよさに気づくことができた児童もいる。

## 課題

- ・「学びの姿」のカードのうち、本時では児童の発言を受け、「協力」「積極的」「表現する」を提示し、目標とした。3つあると意識を保ちにくい面もある。事後協議会での反省をふまえて、次時からは提示するカードは1種類にすることにした。



歴史探検「大浦神



歴史探検の振り返り

毎時間のふりかえりをこのドキュメントに書いていきます。

- ・気がついたこと ・考えたこと ・友達のがんばり ・自分のがんばり
- ・次にやるべきこと ・次にやりたいこと など

友達とリンクなどの役割を分担して少し進めれた。

たくさんのお島の資料を読んで言葉をもとめて写真や地図も使って前よりだいぶ進んで良かったです。

村上森造さんのことについて2人で文を変えたり交代しながら打ったり、して楽しくできました。

第二次 調べ学習の振り返り  
クロームブックの活用



第二次 スクラップボックス  
による共同編集